



「多様性の包摂」 大切にすべきことは何だろうか

西部教育事務所 所長 関口 正一

葉を落とす営みは、どの樹木にも共通しています。これは「一様性」と言えます。一方で、葉を落とす時期は一本一本異なります。そこに「多様性」があります。これは、植物に詳しい先生から伺ったお話です。

近年、「多様性の包摂」という言葉が注目されています。学校現場に目を向けると、「何を、どこまで行えば包摂と言えるのか」と戸惑う声も聞かれます。

海外では、肌や目、髪の毛の色など、外見の違いから多様性を認識しやすい環境があります。これに対し日本では、多様性が外見からは分かりにくい場合が多く、そのことが、多様性への理解や対応を難しくしている側面もあるようです。だからこそ、日本の学校においては、「違いそのもの」よりも、「違いをどう受け止めるか」が重要になってくるのではないのでしょうか。

「多様性が包摂されている状態」とは、単に特別な支援を増やすことではなく、必要な配慮を、特別なことと思わず、自然に受け入れられる状態のことだと私は考えます。例えば、視力の弱い子供が前の席に座ることを、誰もが不満なく受け入れられるのは、それが「特別な対応」ではなく、「当たり前工夫」として認識されているからです。同様に、情緒的に不安定な子供が落ち着かなくな

った場面で、「なぜあの子だけ？」と個人の理由に向かうのではなく、「安心できる環境があれば、人は心を落ち着かせることができる」という見方が学級に広がっていれば、周囲の戸惑いも小さくなり、包摂は日常の一部になっていくはずで。そのためにも、私たち大人が、特別な配慮やルールを特定の個人に紐づけることなく、「誰にでも起こり得ること」「学級全体を支えるための工夫」として伝えていくことが大切です。もちろん、全ての子供に共通して保障されるべき学びの土台を「一様性」と考えるとき、その土台を崩してまで多様性が優先されることは避けなければなりません。

「多様性の包摂」で大切にすべきことは、一人一人の子供が、「自分は大切にされている」「存在を認められている」と感じられることです。また、「結果だけではなく、努力や過程も見てもらえている」と安心できることです。そのような学校づくりを、教職員みんなで共通理解として進めていくことが重要です。このような取組は、すでに多くの学級や学校が取り組んでいるのも事実です。こうした実践が、今後もさらに多くの学校に広がっていくとありがたいです。

今年度もよろしく願いいたします。

各学校における教育目標の具現化に向け、西部教育事務所では下記の事業の支援を行っています

・「インクルーシブな学校運営モデル事業」(高崎市立桜山小学校)

子供の多様性と学校内の居場所づくりに着目した、インクルーシブな学校運営について研究します。

・「教育課程柔軟化サキドリ研究校事業」(安中市立松井田中学校)

1コマ45分によって創出される『裁量的な時間』を活用した、柔軟な教育課程編成を研究します。

・「学校エージェンシーを発揮する授業改善プロジェクト」(藤岡市立小野小学校：11月13日公開授業)

一人一人がエージェンシーを発揮する学びを具現化し、県内全域への展開を図るための研究をします。

・「スクールカウンセラースーパーバイザー、スクールソーシャルワーカーの派遣」

(例) 生徒指導上の諸課題に対して、関係機関等と連携を図りながら解決に向けた支援を行います。

・「特別支援教育専門相談員の派遣」

各学校・園等に在籍する特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒への指導等について、先生方の相談に応じています。通常の学級・特別支援学級・通級指導教室を問いません。

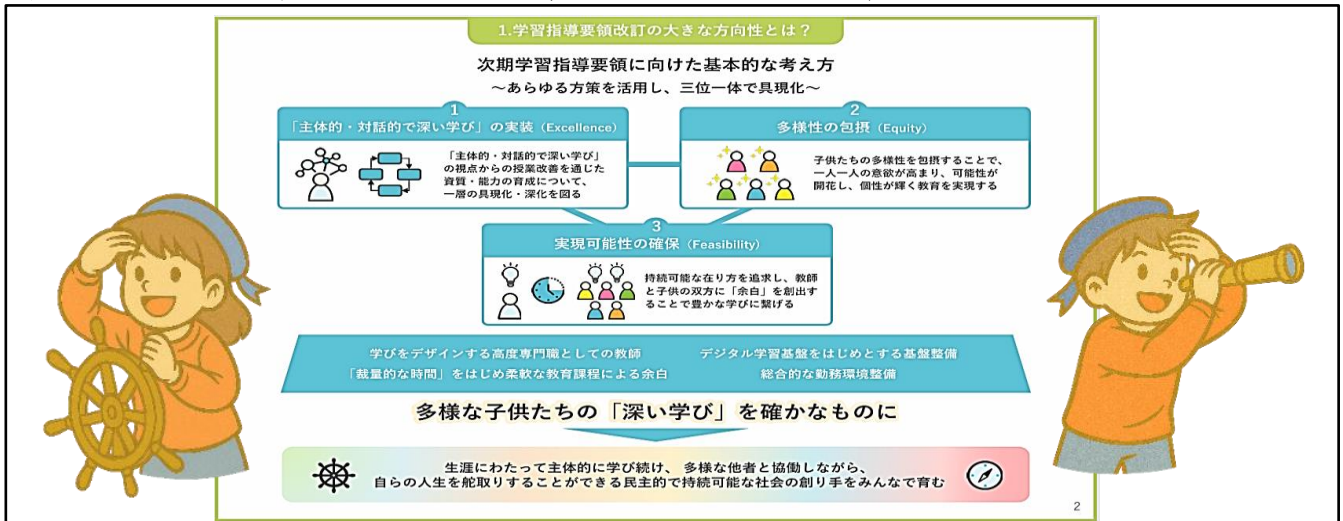


教育課程企画特別部会における論点整理

～ 次期学習指導要領に向けた基本的な考え方 ～



現在、次期学習指導要領に向けた検討が進められています。検討の全体を貫くメインテーマは、「多様な子供たちの『深い学び』を確かなものに」であり、これを「主体的・対話的で深い学びの実装」(Excellence)、「多様性の包摂」(Equity)、「実現可能性の確保」(Feasibility)という三位一体の改革によって具現化することを目指しています。本改訂には、これからの社会を生きていく子供たちに「自らの人生を舵取りできる力」を養い、「民主的で持続可能な社会の創り手」となってほしいという願いが込められています。その実現に向けて、先生方が何をどのように取り組んでいけばよいか考えましたので、今後の指導に生かしていただければ幸いです。



① 「主体的・対話的で深い学び」の実装について

教育課程特別部会 論点整理(ポイント概要版)

【「好き」を育み「得意」を伸ばす】

○「やりたい!」という意欲を学びにつなげるために、日頃から子供たちの様子を丁寧に観察し、好きなことや得意なことなどの実態を踏まえた単元・題材計画を立てましょう。

【生きて働く「確かな知識」の習得】

○活用した知識や技能が本当に役立つよさを味わうために、実生活に関連する単元・題材の課題や活動を位置付けましょう。

【実体験の重要性】

○五感を通じて学びの面白さや価値を感じられるように、ものづくりや見学、観察・実験、専門家の話を聞くなどの体験型学習を行う機会を設定しましょう。

② 多様性の包摂について

【可能性が開花し、個性が輝く教育】

○これまで以上に子供の意欲や可能性を引き出すために、一人一人に合った資料や情報、まとめ方や発表方法などを選択することができる環境を構成しましょう。

【心理的安全性のある環境】

○誰もが「存在を認められている」と感じられるように、子供との関わりや教材、掲示物、活動内容などについて、温かく共感的な姿勢を意識しましょう。

③ 実現可能性の確保について

【「余白」のある豊かな学び】

○先生も子供たちもゆとりをもって学習に向き合えるように、教科等の内容を改めて見直し、本当に必要な内容や活動を精選しましょう。

【デジタル学習基盤の充実】

○これまで以上に積極的なICT活用について語り合える雰囲気をつくるために、普段から職員室でICT活用に関する好事例や困り事をつぶやきましょう。

今までの教育の在り方を大きく変えるのではなく、これまで大切にしてきた教育活動を再確認し、未来志向でさらなる充実を図っていただけたらと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。